氏　　名	KACZOROWSKI Karol Krzysztof（ｶﾁｮﾛﾌｽｷ ｶﾛﾙ ｸｼｼｭﾄﾌ）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第70号
学位授与日	平成30年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	Transfer of the Unsayable - The utilization of academic discourse in art
審査委員	主　査　　教　授　　久保田　晃弘
	副　査　　教　授　　木下　京子
	副　査　　メディアアート研究者　　馬　定延
	指導教員　　教　授　　久保田　晃弘

内容の要旨

本論文の主な目的は、アートにおいて学術的言説を適用させることの可能性を探究することである。また、すでに存在する種々の論説を類別して検証し、その批判的意見をも併せて提示することも目的としている。

アーティストのコンセプトやアイデアを具現化するために、作品のかたちやそれらの媒体となる素材が決定することを前提とし、アートにおける理論的枠組みは構築されている。アーティストにとって素材とは作品の「意味」を呈する核心となるべきものであり、それが多岐に渡る文脈の中でさまざまな媒体によって表現されている。アーティストたちが作品を通して示すアイデアは、科学者や哲学者など学者や批評家たちの興味と共通し、学術的言説の一部として取り上げられることもある。彼らの著述は、アートとは異なる学問的アプローチにより論旨は説明的、且つ理論的に展開し、アートに新たな視点を与えることを可能にする。加えて、美術的なプロセスそのものが、時には（自然科学・社会科学・人文科学の）学術論文で議論の対象となっている。本論ではアートに対するこのような学問的アプローチを紹介し、考察を深める。

序章では、学術的論述を用いて本研究を進めるために、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインとジョセフ・コスースの言説を取り上げ、彼らの思想を理解する上で必要とされる哲学的視点を明らかにする。これはアートについて言語化することや科学そのものに対して非常に懐疑的なアーティストのアプローチを明らかにするものである。

第一章では、科学的文脈からアートを扱う新しい学問である神経美学（Neuroaesthetics）について紹介する。この研究の推進者はアートの論述には神経美学を用いることが必須要素であると主張している。神経美学では、絵画の画像を被験者に見せその脳の反応をMRIで観測し、実験結果を分析することを基本としている。しかし「美しさ」に反応した結果のみを抽出し、それを還元してアートとして定義づけすることは、科学的にも美学的にも理論的根拠を欠くものであり、筆者はアートと科学のつながりを説く神経美学の学問そのものを否定する立場を取る。また科学とアートの関係性については、様々な分野で活躍する研究者たちの種々の論考を

紹介し、その上で、哲学的アプローチの重要性を説く。

第二章では、アート作品と科学的論述のつながりに関する既存の学術的言説を列挙し、概要を述べる。それぞれ異なる観点を持つ言説を選択したが、年代順に記すと次のようになる。「4次元数学に関して」、「マルセル・デュシャンとマックス・エルンストとの関係」、「イヴ・クラインとクラインブルーについて」、「ロバート・スミッソンの作品の制作過程とDNAレプリカの類似性」、「フランツ・ウエストとヴィトゲンシュタインの著述についての関連性」、「天文学的にみるガブリエル・オロスコについて」である。さらに本章では、アートに心理学的理論を用いることを提案しているグレゴリー・ミニッサーレの著作を紹介する。

第三章では、前章で紹介した種々の思考的アプローチを実践したグレゴール・シュナイダーによるプロジェクト《Unsubscribe》に焦点を当てる。シュナイダーはナチスのプロパガンダ大臣であったジョセフ・ゲッベルスの生家を買取り、解体し、展覧会で発表した。

作品はインスタレーションとして構成され、解体された家の瓦礫や家の中にあった品々が展示された。本章ではこの文脈を把握するために、プロジェクトの過程やアーティスト自身について、そしてギャラリーの背後にある歴史について詳細に記述する。また本プロジェクトの客観的裏付けを行うため、並行して様々な学術的言説をシュナイダーのプロジェクトに照射させて論述する。

最終章では付録の形式をとり、筆者が博士後期課程在学時に制作した作品について述べる。これらはアートについて言及しているアーティストの作品と著述を研究し、自作に援用したものである。本章で取り上げる作品は、《デコチャリ-アンパン丸》《One Cup Ozeki－ippai》《Future Perfect Continuous》《中央線に設置された自殺防止用の青色電灯》の4点である。

本論文は、各章で考察した事項を通して、多面的な視点を提供するものである。それと同時に、現代美術の本質を正しく理解することは、あらゆる種類のアートについて思索することが必要条件であることを証明するものでもある。それはまた、アートにおける科学の限界と関連して言語の限界をも示している。ここで提案された推論は、アートのために科学的論説を用いる新たな試みと述べることができるが、アートの多様な特性のために、本論で紹介したアプローチは普遍的な方法としてではなく、いくつかのケースに役に立つ主観的な道具として扱われるべきものある。

The main objective of this thesis is to investigate possible applications of academic discourse in art. The thesis also gathers and inspects already existing research on that topic and provides a critical reflection on them.
The theoretical framework behind the thesis is based on the assumption that conceptual features of artwork are the most important. Meanings are the “material” with which artists work; they use various media to express different contexts. One aim of the thesis is to show points of commonality between works created by particular artists and the results of academic works of scientists, philosophers, critics, etc. The differences between the academic approaches and artistic activities are detailed, before showing that it is sometimes possible for art to benefit from such juxtapositions when common points are found. Sometimes the artistic process itself is the area of interest for philosophy or the different branches of science, the humanities etc.. The purpose of this thesis is to introduce different types of such commonalities and point to the

possible benefits of creating such references. It will introduce academic approaches towards art and work towards a deeper discussion.

In the introduction, works by Ludwig Wittgenstein and Joseph Kosuth will be presented, and the philosophical perspective necessary to digest their ideas will be explained. This will involve a discussion of the limitations of language and of science when dealing with art.

The first chapter will introduce the new academic field of Neuroaesthetics which deals with art from a scientific context. The authors of neuroaesthetics research make claims that the use of neuroaesthetics is a vital component for a full understanding of art. In brief, the basic method of experimentation in neuroaesthetics has been that an image of a painting is shown to a research subject in an fMRI machine, and the response of their brain is measured. The results of these experiments are then analyzed. However, based on these results, the researchers have made sweeping claims to be able to give definitions for 'art' and 'beauty', but without a knowledge of the theoretical fundamentals of art required to be able to discuss either. The author of this thesis adopts a position critical of the methodology and assumptions behind the field of neuroaesthetics which claims to bridge art and science. Regarding the relationship between art and science more generally, various positions by researchers active in a variety of different fields will be introduced and the necessity of a philosophically grounded approach will be explained.

The second chapter will look at already existing examples of academic discourse related to the connection between works of art and scientific discourse and will give an overview. Discourse which adopts a range of different outlooks has been selected but given in chronological order, they appear as follows. about 4 Dimensional Mathematics and its connection to Marcel Duchamp and Max Ernst, Ive Klein and Klein Blue, resemblances between Robert Smithson's work and working process and the DNA model, connections between Franz West and Wittgenstein's writing, and Gabriel Orozco viewed from the perspective of astronomy. Furthermore, this chapter will also introduce the work of Gregory Minissale who proposed applying psychological theory to art.

The third chapter will focus on Gregor Schneider's project unsubscribe which puts into practice many of the ideas introduced in the previous chapter. In this project, Schneider purchased the childhood home of the Nazi propaganda chief Joseph Goebbels, lived in it, dismantled as much of it as possible, then assembled an exhibition.

The work took the form of an installation in which debris from the torn down house as well as various items from the inside of the house were displayed. In order to explain the context of this project, this chapter will look at the history of the project and of the artist himself, and will go into details about the exhibition. In order to give an objective overlook of this project, certain academic discourses will be presented in parallel to Schneider's project.

The final chapter takes the form of an addendum and will discuss the art works created

by the author of this thesis during their time as a doctoral student. This will also involve some research into artists who actively wrote about art. Their art works and writings will be mentioned, which provides the author with some clues for discussing their own work. The works presented in this chapter are the following four projects: Deko chari - Anpan maru, One Cup Ozeki - ippai, Future Perfect Continuous, Blue lights of Chuo line.

In this thesis, through the topics considered in each chapter, a diverse array of perspectives are presented. At the same time, proof is offered that in order to correctly understand the fundamentals of contemporary art, it is a necessary condition that one give thought to every different form of art. Moreover, the limitations of science and language when it comes to art are presented. This thesis will attempt to point towards a new methodology for using academic discourse for the sake of art. However, because of the numerous special characteristics of art, this thesis will not give a universally applicable method, but rather will provide a mode of reasoning which is a subjective tool and may be useful in certain cases.

審査結果の要旨

著者のカチョロフスキ・カロル・クシシュトフ（KACZOROWSKI Karol Krzysztof）君は、ポーランド出身のアーティストである。母国で現代美術を学んだ後に来日し、多摩美術大学の大学院で、アートと科学の関係を探求することを出発点に、本論文の内容に関する制作と研究を発展させてきた。こうした経歴の集大成でもある本研究の目的は、タイトルにあるように、（言い得ないものごととされて来た）アートにおける（理工学と人文学の両方を含む）学術的言説の役割と、それを作品の創作および理解に繋げてく方法と意味について、さまざまな視点から検討することにある。

爾来、アート活動は人間の主観や情動に根ざすもの、あるいは自己表現や社会批判という、客観的な言説とは相容れないものとして認知されることが多かった。とりわけ、こうした言説は、アートの外側だけでなく、内側からも強く聞こえて来ることが多い。ゲームやエンターテイメントがFPV（ファースト・パーソン・ビュー）の視点を取ることが多いように、作品制作も往々にしてFPVになりがちだ。本論文の主な目的は、アートにおいて学術的言説を適用させることの意味と可能性を探究することである。それは言い換えれば、アートにおけるTPV（サード・パーソン・ビュー）の視点の重要性を再確認することでもある。TPVは客観的な味方になることもあるし、そうでないこともある。学術的言説は主観と客観の区分けを導くのではなく、FPVとTPVの違いを顕在化する。FPVは絶対的、唯一的であり、TPVは相対的、多元的である。

本論文の構造自体も、TPV的な方法をとっている。すなわち、本論文のサブタイトルである「学術的言説のアートへの応用について」すでに存在する種々の論説を分類しながら検証し、その批判的意見をも併せて提示することで、議論の内容を深めていく。

アーティストのコンセプトやアイデアを具現化するために、作品の形態とそれを支持するメディアとなる素材を出発点、あるいは前提として作品を分析・批評する、あるいはその文脈を考察する理論的枠組みが構築されていることが多い。アーティストにとって素材とは作品の

「意味」を呈する核心となるべきものであり、それが多岐に渡る文脈の中でさまざまなメディアによって表現されている。アーティストたちが作品を通して示すアイデアは、アートの世界（アートワールド）のみならず、科学者や哲学者など学者や批評家たちの興味と共通し、学術的言説の一部として取り上げられることもある。学術的言説は、FPV を主流とするアートとは異なるアプローチで、論旨は説明的、且つ理論的に展開し、アートに新たな視点を与えることを可能にする。加えて、美術的なプロセスそのものが、時には（自然科学・社会科学・人文科学の）学術論文で議論の対象となっている。本論文が対象としているのは、アートに対するこのような学問的アプローチの分析と考察である。

本論文は序章と付録を含む、全体で５つの章からなる。

序章では、学術的論述を用いて本研究を進めるために、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインとジョセフ・コスースの言説を取り上げ、彼らの思想を理解する上で必要とされる哲学的視点を提示する。本論文において「言語」は極めて重要なポジションに置かれている。序章は、アートについて言語化することや、科学そのものに対して非常に懐疑的なアーティストのアプローチを明らかにすると同時に、本論文の結論は、すでにこの序章においてすべて含まれており、まさに「Conclusion in advance」とも呼べる重要な部分を占めている。

第一章から、アートに対する学術的言説の事例紹介（フィールドワーク）と分析が始まる。まず、科学的文脈からアートを扱う新しい学問である神経美学（Neuroaesthetics）について紹介する。この研究の推進者はアートの論述に、神経美学を用いることが必須であると主張している。しかしその実験方法や解析方法にたいする疑問、さらには美術と「美しさ」を区別できない哲学的未熟さは、美学的のみならず科学的にも理論的根拠を欠くものであり、筆者はアートと科学のつながりを説く神経美学の学問そのものを（当初は期待していたにもかかわらず）否定する立場を取ることとなった。また科学とアートの関係性について、様々な分野で活躍する研究者たちの種々の論考を紹介しながら、哲学的アプローチの重要性を説く。

第二章では、アート作品と科学的論述のつながりに関する既存の学術的言説を列挙し、それらの概要を分析的に述べている。それらを年代順に記すと「４次元数学に関して」、「マルセル・デュシャンとマックス・エルンストとの関係」、「イヴ・クラインとクラインブルーについて」、「ロバート・スミッソンの作品の制作過程と DNA レプリカの類似性」、「フランツ・ウエストとヴィトゲンシュタインの著述についての関連性」、「天文学的にみるガブリエル・オロスコについて」となる。さらに本章では、アートに心理学的理論を用いることを提案しているグレゴリー・ミニッサーレの著作を紹介する。

第三章では、前章で紹介した種々の思考的アプローチを実践したグレゴール・シュナイダーによるプロジェクト《Unsubscribe》に焦点を当てて論考する。シュナイダーはナチスのプロパガンダ大臣であったジョセフ・ゲッベルスの生家を買取り、解体し、展覧会で発表した。作品はインスタレーションとして構成され、解体された家の瓦礫や家の中にあった品々が展示された。本章ではこの文脈を把握するために、プロジェクトの過程やアーティスト自身について、そしてギャラリーの背後にある歴史について詳細に記述した。また本プロジェクトの客観的裏付けを行うため、並行して様々な学術的言説をシュナイダーのプロジェクトに照射させて論述する。

最終章は付録の形式をとり、筆者が博士後期課程在学時に制作した４つの作品、《デコチャリ-アンパン丸》《One Cup Ozeki - ippai》《Future Perfect Continuous》《中央線に設置され

た自殺防止用の青色電灯》について述べている。第三章までの分析は、特にグレゴール・シュナイダーのアプローチは、著者の作品制作の方法と密接に関連し、本論文の内容が、著者の作家としての考え方、芸術に対するアプローチに対する、直接的な表明となっていることが明らかにされる。

本論文は、各章で考察した事項と著者自身の作品分析を通して、芸術と学術的な言説に対する多元的な TPV を提供するものである。それと同時に、現代美術の本質を正しく理解することは、あらゆる種類のアートについて思索することが必要条件であることを示している。それはまた、アートにおける科学の限界と関連した「言語の限界」をも示している。ここで提案された推論は、アートのために学術的論説を用いる新たな試みということもできるが、アートの多様な特性のために、本論文が採用したアプローチは普遍的な方法としてではなく、いくつかのケースに対して役に立つ、ひとつの道具の提案として扱われるべきものかもしれない。しかしながら、本論文は、科学と芸術という今日的かつ普遍的なテーマに対して、それを広く理工系や人文系の枠を超えた学術的言説を通じて深く探求したものであり、その意義や成果は非常に大きい。よって審査委員の総意として、本論文を学位を授与するに相当のものと認める。

（久保田 晃弘）